

令和 5 年 5 月 30 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00135

研究課題名(和文)太鼓音楽の普及と発展に関する動態的研究

研究課題名(英文)Dynamics of the spread and growth of taiko music

研究代表者

中原 ゆかり (NAKAHARA, YUKARI)

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：00284381

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：2019年度末より新型コロナの影響で現地調査は不可能となったため、研究方針を次の三点に変更した。(1)以前から付き合いのある太鼓のグループを対象を絞り、過去の調査資料の内容をメールや電話、手紙等で確認しながら、論考にまとめた。(2)過去に採集した映像音響資料のデジタル化をすすめ、必要に応じて担い手たちと共有した。(3)コロナ禍の太鼓グループの活動について、ネットやSNSを利用して調査、記録した。特に2020年の東京で開催されたWTCは世界の太鼓グループが一同に会する初めての機会であり、コロナ禍の状況も相まって、担い手たちが太鼓を打つことの意義を考える重要な機会となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

新型コロナ以降、現地調査はできなかった。担い手たちは、活動は制限されたが、太鼓を打つことの意義を考え、グループの歴史を知り、他と繋がる意義を考える期間ともなった。本研究の特徴は、論考に関連する資料や、映像音響のデジタル化資料を、研究代表者と担い手たちが共有してきた点にある。その結果本研究には、(1)太鼓音楽の記録を残すという学術的な意義、(2)担い手自身が自分たちのグループの歴史を知ること、太鼓音楽の社会的=文化的意義を考えることができる、という二つの側面があるといえる。なお、古い音響資料の共有により、消えていたレパートリーを復活させたという事例もみられたことを付け加えておきたい。

研究成果の概要(英文)：Since the end of 2019, the spread of the COVID-19 pandemic has put a halt to my fieldwork, so I redirected my research into the following three areas:

1)Focusing on only the taiko groups with whom I already have a relationship, I pulled together the materials previously collected, confirming some of the contents via e-mail, telephone calls, and letters, and summarized them in my discussions. 2)I digitalized audio-visual recordings I had collected and shared them with the performers as appropriate. 3)Taking advantage of the internet and social networking services, I researched and recorded taiko group activities during the pandemic. In particular, the 2020 World Taiko Conference held in Tokyo - the first event to gather taiko groups from around the world - coupled with the crisis, provided an important opportunity for performers to consider the significance of playing taiko.

研究分野：文化人類学、音楽人類学

キーワード：音楽人類学 太鼓 太鼓音楽 組太鼓 創作太鼓 世界音楽 伝統 創造

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は、1997年よりハワイ太鼓音楽の私費調査を開始し、2009年度から2011年度までJSPS科研費基盤研究(C)21520821「ハワイの和太鼓文化：ハワイ祭太鼓の誕生と発展」を受けて調査を継続した。そして、1980年代にハワイで太鼓グループが結成されるまでの概要、ハワイの太鼓音楽の特徴を分析し、単著『ハワイに響くニッポンの歌』(人文書院、2014)にまとめている。

(2) 2013年からは、太鼓音楽史全体を著すという構想のもとに、JSPS科研費挑戦的萌芽研究25580043「太鼓音楽史序説：誕生から海外進出まで」、JSPS科研費基盤研究(C)16K02312「太鼓音楽の発展に関する歴史的研究：日本の太鼓音楽から世界音楽へ」により、戦後の日本でジャズドラマーの小口大八が組太鼓(創作太鼓)の手法を考案し、日本各地や北米に広がっていた状況を明らかにした。特に1980s-1990sの日本国内では「太鼓ブーム」と呼ばれるほどに太鼓グループが多数結成され、女性の参加、アマチュアを含めた太鼓職人の増加、そして国境を越えた交流がみられるようになったことを確認した。

(3) 上記(1)(2)に引き続き、全体の内容において調査不足だった太鼓と社会包括についての調査を行いつつ、21世紀の太鼓音楽の調査を行うことを本研究の目標としていた。

2. 研究の目的

(1) 2019年度、本研究を開始した時点では、太鼓音楽の普及について、太鼓と社会包括等についての事例も含める等、これまでよりも詳しく調査し、細かな分析を進めていくことを目的としていた。

(2) しかし、2019年度の末から新型コロナの影響により現地調査が全くできない状況となった。そういった中で可能なのは、これまでの調査資料の整理、デジタル化、およびこれまで親しく付き合ってきた太鼓グループとのメールや手紙、電話によるやりとり、および現地へ行かなくとも取り寄せ可能な資料を参照することであった。

そこで研究方針を変更し、太鼓音楽史全体を著すというこれまでの研究目的とあわせて、映像音響資料や文字資料のデジタルアーカイブも視野に入れつつ、研究をすすめていくこととした。

(3) 新型コロナという100年に一度のパンデミックのもと、全ての音楽や芸能、パフォーマンスは大きな打撃を受けた。そういった状況にあってどのような活動をするのかを、ネットやSNSを活用してできる範囲で調査を進めた。

3. 研究の方法

(1) 2019年度、新型コロナ以前までは、新たに太鼓と社会包括に関連した現地調査を行うことができた(現地での活動の見学、主要な人物へのインタビュー、文字記録の収集など)。その後コロナ禍となったため、調査の続きはコロナ後まで持ち越すことにした。

(2) 2019年度末からの新型コロナ以後は、現地調査は全く不可能となった。そこでこれまでの調査資料のデジタル化、整理、文章化を行った。必要と思われるものは、現地の担い手たちと共有し、整理、文章化するにあたっての確認、情報交換を行なった。現地の担い手たちとは、メール、電話、手紙などで連絡をとりあった。また、現地の担い手たちから依頼されたオープンリールテープや、8ミリ・16ミリテープのデジタル化も行った。

(3) コロナ禍の太鼓音楽については、主にネットやSNSを使い、かねてから付き合いのある担い手たちと連絡を取り合うことで、状況を把握した。ズームなどで参加可能なイベントには参加した。

4. 研究成果

(1) いくつかの資料については、現地の担い手たちと情報を確認、共有しながら、文章化して論考をまとめることができた。具体的には、「スケート諏訪の小口大八：御諏訪太鼓以前」(愛媛大学法文学部論集人文学編51,2022)、「奥伊予太鼓の結成と継続：創作太鼓の民俗芸能化をめぐる」(愛媛大学法文学部論集人文学編53,2022)、「太鼓音楽の伝承と創作：小口大八の活動を中心に」(『音と耳から考える：歴史・身体・テクノロジー』アルテスパブリッシング2021,所収)

等である。

(2) 現地の担い手たちと映像音響資料を共有してきた。古いオープンリールのデジタル化をおこなって共有してきた中では、現在はもう伝承しなくなっているレパートリーを復活させるための練習を始めたという報告も受けている。また担い手たちとの資料の共有は、すぐに成果があらわれるようなものではないが、将来的なアーカイブの構築やこれからの伝承について意見交換をするきっかけになっている。

(3) コロナ禍における太鼓音楽の状況については、最初の頃はグループの練習や演奏を全面的に休業するところもあったが、ズーム配信などでコンサートやイベント、ワークショップを開催する試みも行われるようになっていった。またグループの練習は復活しても、話せない、他のグループとの交流ができないという状態が長く続いた。2020年に東京で開催されたWTCは、ズーム開催とはなったが、世界中のグループが集う初めての機会であり、太鼓の歴史、曲の創作、楽器としての太鼓の創作についてなど、活発な意見を聞くことができた。ズームでの意見交換の利点も指摘されており、今後のイベントや太鼓会議の開催方法に影響することが予想される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 中原ゆかり	4. 巻 51
2. 論文標題 「スケート諏訪」の小口大八 御諏訪太鼓以前	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛媛大学法文学部論集、人文学編	6. 最初と最後の頁 1-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中原ゆかり	4. 巻 31-1
2. 論文標題 ハワイ松竹楽団と「別れの磯千鳥」：美空ひばり12歳のハワイ公演をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 69-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/00003188	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中原ゆかり	4. 巻 53
2. 論文標題 奥伊予太鼓の結成と継続－創作太鼓の民俗芸能化をめぐって－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 愛媛大学法文学部論集人文学編	6. 最初と最後の頁 1-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中原ゆかり	4. 巻 683
2. 論文標題 木曾節の創造と普及－伊東淳の戦略－	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 立命館文学	6. 最初と最後の頁 129-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 細川周平、阿部万里江、岡崎峻、昼間賢、春日聰、鈴木聖子、齋藤桂、中原ゆかり、他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 アルテスパブリッシング	5. 総ページ数 611
3. 書名 音と耳から考えるー歴史・身体・テクノロジー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------